

## 従来の都市計画は時代遅れ。 住民の声を聞く「開発」を

第二日は「shimokitazawa GARDEN」で行われ、会場は住民を含む参加者で埋め尽くされた。

「下北沢から問う!日本の都市計画」では、専門家らが「都市計画」全般の矛盾を鋭く指摘。千葉大学教授(都市計画)の福川裕一氏は、「いまだに都市計画は、「高層化して、オープンスペースをとり、道は広く」という概念から脱却していない。通りが建物と関連して賑わうという現状を視野に入れない」と斬る。東京大学大学院教授(社会経済学)の松原隆一郎氏は、学生時代、下北沢のボクシングジムに遇ったことを前置きし、「土地を収益でとらえる発想が、都市計画の核にあり、駅前に高層ビルを建てるような計画をつくり出してきた。収益率の悪い個人店は駆逐されてしまう。小規模改革の元で、容積率緩和が加速した」と批判。一橋大学教授の町村敬志氏は、「脱工業化・情報化の中、都市は、ネット空間が張り広げる変化の速度についていけなくなっている。だからこの都市空間が「場の力」を持つべき。それはシモキタのような人と人が触れ合うまちのことだ」と論じた。

シンポジウムでは、地元市民も壇上で意見を述べた。ある青年は大きな声で語る。「俺は、バンド活動で日本中の少年院を回った。そんな折、意識ある地方の農家と出会い、農業に目覚めた。今、この音



シンポジウム当日も祭が、子どもたちが演奏のまちシモキタで、自分が

つくった野菜を使った「農民カフェ」を開いている。奇跡的にテナントを借りることができた。これは運命だと思う。自分の人生の集大成を実現できるのは、シモキタしかない。だから開発に反対だ」。

総合司会で下北沢商業者協議会代表の大木雄高氏は、シンポジウムで出された声をまとめる。「シモキタで生きたいと決意する若者がいれば、愛着を持って住み続ける人もいる。そうした人の意見を反映した「正しい開発」が必要だ。こうした文化イベントを今後も続けて世論に呼びかけていきたい」。

11月30日(月)11時より、東京地裁103号大法廷で第15回口頭弁論が行われる。関心のある市民の傍聴を募っている。詳細は <http://www.courts.go.jp/tokyo/about/syozai/tokyotisai.html>

## 特派員レポート

### 北海道発信、「建築家のイメージネーション」とは

北海道の40歳以下の建築家による建築以外の表現展は今年も盛況

#### 札幌支局

近頃は建築・インテリア・ファッションなどをクロスオーバーしたライフスタイル全般にかかわる情報をトータルに取り扱う雑誌が多数発行されている。そのおかげもあって建築家の職能を理解してくれる一般の人々が増えているのは事実であろう。しかしながら日本においてはそうした情報の発信源、トピックはほとんど首都圏に集中しており、地方の建築家を知る機会というのはまだまだ少ないというのが現状ではないだろうか。北海道、特に札幌に関してはほぼ200万人という人口を擁する大都市であるながら、情報発信力はそれに比例していない感が否めない。

そんな北海道の建築家、特に40歳以下の若手から一般市民へ向けての情報発信として2002年から年に1度開催されている展覧会「北海道の40歳以下の建築家による建築以外の表現展」(通称UN40展)が今年も8月20日から30日まで札幌市中央区にあるギャラリー門馬アネックスにて11人の若手建築家が参加し開催された。この企画は図面や建築写真などを並べた、いわゆる建築展ではなく、建築家の思考過程におけるさまざまなイメージネーションや日常における問題意識などを建築以外の表現方法によって視覚化しようとする試みであり、「建築家は普段どのようなことを感じ、何を考えているのか」を一般の人々にも広く感じてもらうための自由な表現展である。建築の枠を外した表現とすることで、建築に興味のない人にも気軽に足を運んでもらい、まずは建築家という職業を知ってもらいきっかけをつくりたいという思いと、建築家自身も

普段とは違う発想のトレーニングができるという思いが重なったこの企画には、会場が都心部から離れた小さなギャラリーであるにもかかわらず、10日間程度の会期中毎年500人以上の人々が訪れてくれる。

初回から企画に携わっていた実行委員のほとんどが来年40歳を迎えるため、今後どのような形でこの展覧会が続くのか予想できない部分は多いが、この活動から派生

した雑誌の制作や、他の文化的イベントへの参加などによって少なくとも札幌圏では「UN40」の認知度が上がりつつあることは成果として素直に喜ぶべきであろう。

(赤坂真一郎|アカサカシンイチロウ|アトリエ)



ギャラリー門馬アネックスの展示風景